

2026年度

# J r H 小 論 文

## 注 意

1. 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。鉛筆またはシャープペンシル・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
3. この問題冊子は4頁までとなっています。試験開始後、ただちに頁数を確認してください。
4. 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認してください。
5. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
7. この問題冊子とメモ用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、下記の問に答えなさい。解答は解答用紙の所定欄に記しなさい。

機械時計の出現がもたらした最大の時間革命は、不定時法から定時法への転換である。不定時法というのは、簡単にいえば、日の出から日没までの昼間の時間、および日没から日の出までの夜の時間を、それぞれ十二時間として計算する方法である。したがって昼間の一時間と夜の一時間は、春分と秋分の日を除くと、季節と緯度によって異なるわけである。早い話が緯度の高い北ヨーロッパでは、例えばロンドンの夏は午後十時になってもまだ明るいし、もっと北に位置するスウェーデン北部では夜のない白夜になる。冬はその逆に夜が長いわけで、夏の昼間と冬の昼間では、同じ一時間でも極端に長さがちがう。それでも農業を生活の基礎とする社会では、太陽と自然のリズムに従って設定された不定時法がもっとも自然に適した時刻制度であった。

ところが機械時計が出現すると、機械がつくる時間は人工の平等な単位時間になる。季節や場所のいかにかわらず、昼も夜も、一時間の長さは同じで変わらない。これを定時法というが、定時法は何も機械時計の出現によって初めて生まれたわけではなく、古代からその考え方はあった。すなわち定時法はまた真太陽時ともいって、正午に始まりつぎの正午に終わる一日の時間を二十四等分したものを一単位時間とする方法である。機械時計のない時代では時間の管理がやっかいである一方、日常生活には不定時法の方がはるかに便利で実用に適していた。

しかし機械時計が出現し広く普及しはじめると、機械時計は、昼と夜、季節と場所によってそれぞれ時間単位がちがう不定時法には合わせにくい、単位時間が季節や場所のいかにかわらず一定である定時法にはぴたりと結びつく。そこで機械時計の出現・普及とともに、ヨーロッパでは不定時法から定時法への大転換が起こるのである。

こうして中世ヨーロッパにおける定時法の普及は、イタリアの都市から始まり、イタリアの機械時計とともにアルプスを越えて広がった。イタリアで一日を等分の二十四時間に分けたのは十四世紀初めのこと、そして夜中の一時に一つ、二時には二つといったふうに、等間隔時で午前午後それぞれ十二回、最初の鐘を鳴らしたのはサン・ゴットアルド教会の鐘で、一三三五年のことであった。こうして十五世紀になると、機械時計の普及とともにヨーロッパ各地で急速に定時法が採用されるようになる。定時法システムの成立によって、等価等質の労働時間を単位とする商品生産、産業資本成立の基礎的条件ができ上がる。

ところで注目すべきは、定時法の普及に積極的であったのは、新興都市市民階級であったということである。というのは、商人や手工業者の間では、「時間」が職業的営みのなかで、貨幣と同じように貴重な価値をもつものとして意識されつつあったからである。利潤

が商人や職人の関心の中心になってくるにつれて、時間の正確な計測がいっそう重要になってきた。新しい時間の尺度は、例えばギルドにおける商取り引きの時間の規制、職人の労働時間の規制など、職業上の目的に使われるようになった。

とくに新しい時間観念が新旧勢力の決定的対立をもたらしたのは、利子をめぐる問題である。というのは、商人高利貸資本の活動は、「時間売ることはできない」とした教会の態度と対立したからである。キリスト教の時間は神学的時間で、神とともに始まり神によって支配されている時間である。時間が神のものである以上、時間売って利子をとる行為は神を冒瀆するものである。こうして徴利禁止法が十三世紀に神学者、教会法学者によって体系づけられた。

これに対して、商人の時間は利潤に関係する時間であり、時間を組織的・計画的に利用することが営利なのである。だから商人にとって時間とは、神から離れた客観的時間でなければならないし、それはまた不定時法システムの時間ではなく、定時法システムの時間でなければならない。こうして定時法システムのもとで、時間は商人にとって貨幣になり、貨幣は資本に転化する。「タイム・イズ・マニー」といったのは、ずっと後の、十八世紀中ごろのフランクリンであったが、中世末の商人や銀行家はすでにそのことを理解していたのである。

時間の本質が貨幣であるならば、時間は貨幣と同じように正確に計測されねばならない。ヨーロッパ各都市に出現した公共用機械時計は、「教会の時間」に挑戦する「商人の時間」を象徴するものであり、それは自由都市を牛耳る商人たちの経済的・社会的・政治的支配の道具となった。フランスの歴史家ル・ゴフもいうように、「いたるところ教会の鐘楼に向かい合って取り付けられた大時計こそは、時間の秩序において市民共同体運動のもたらした一大革命」だったのである。一大革命とは、近代的資本主義的時間の成立を意味する。それはほぼ時代的には、十五世紀から十六世紀にかけての時期であったといつてよい。

念のためにひと言注意しておく、こうした「商人の時間」と時計の技術革新を受け入れる方向に進んだのは、キリスト教でも西ヨーロッパのローマ教会だけであるということだ。これに対してギリシア正教会は、商人との和解を容赦しなかったばかりか、新思想をとり入れることさえ許さなかった。二十世紀の現代になっても、十四世紀と同じく、正教会の壁に時計を取り付けることが禁じられているが、それは伝統への厳格な服従のためである。

機械時計がつくり出す時間は、抽象的時間であり、知性的時間である。その抽象的・知性的時間とともに近代が始まる。だから近代とは、神ではなく、人間が時間を制御し、人間が時間を支配する時代である。その結果、人びとの労働に根本的な変化が起こった。

すなわち、自然的時間によって支配された農業社会では、職人の仕事といえば時間に縛られないで、何時間でも何日でも満足するまで時間をかけて良い作品をつくるという、作品中心の労働であった。そうした社会では仕事と生活との間にあまり区別がなく、働くことと一日の時間を過ごすこととの間に大きな対立はなかった。

ところが近代的時間の成立とともに、仕事はいまや時間に縛られた賃労働へと変わってゆく。重要なことは、機械時計の示す人工的時間で表示された労働時間が、いまや労働を規定するようになるということである。周知のように、雇用労働がもっとも早く進んでいたのはイギリスである。イギリスにおける作品中心の労働から時間労働への転換は、だいたい十六世紀中ごろから始まったと思われる。

(角山榮『時計の社会史』による)

#### 問.

人間による時間の支配とはどのような意味か。著者の考えを要約せよ。そのうえで現代における「観光」と「時間」の関係について、自由に論じなさい(800字程度)。